

# ことばと呪しゆ

感覚的なことや心象、創ろうとする映画の色、あるいは、なんとなくイメージする音楽を言葉にすることは、とてもむづかしい。

強く、印象的であればあるほど、その言葉に服従してしまうし、あいまいな言葉なら、何も彼もがあいまいになってしまう。

とはいえ、見えない何かに悩みながらも進まぬ現実には、沈黙、言葉、思考を繰り返している内に、何かガストンと降りて来て、思わぬ喜びに出くわすこともあるから、映画創りはおもしろい。

昨年、あさのあつこさん原作『バッテリー』を映画化した。大ベストセラーだけあって製作側の士気も高く、僕自身も

「中学一年生にして一五〇キロ近い球を投げる天才ピッチャーでありながらも、すべての価値観が信ずる野球だけであるという、少年

の純粹さと、同時に、極端な脆さや危うさを併せもつ少年期独特のアンバランスさを、魅力的に、社会の縮図である学校教育という場で描いてみたい」

という意気込みで取り組んだ。が、これは単なる意思表示の言葉であって、何をどう魅力的に具体として見せるのか、あるいは忍ばせるのが一番重要で大切なことだ。

小説の映画化は意外に難しい。言うまでもなく、小説は言葉が命であり、言葉が想像力をかき立て感動に導く。

一方、映画は直接的に人物、背景を見せながらも、映画的時間の中で、省略・構成を計算し、何よりも、言葉に表現されていない何かを見つけ、映し出すことで映画としての感動を与えなければ、小説を映画化する意味はないと思う。

『呪』は、『名』ということになりました。うか

博雅 『名』？ 清明とか博雅という『名』のことか

清明 はい。『呪』とは要するに、ものや心を縛ること

博雅 「ものや心を縛る？」

清明 「あなた様は源博雅という『名』で縛られております。その『名』がなければ……」

博雅 「……わたしはいなくなってしまうということか」

清明 「いいえ。『名』はなくとも、あなた様がこの世からいなくなるということではありません」

博雅 「何を言っているかわからぬ」  
何を言っているかわからぬ様で、わかる気はする。

教育とは、社会、常識、普通、愛、幸福、人生、文化、芸術、伝統、ナシヨナリズム、自由、神、心、日本人、宇宙とは……

当たり前前に受けとめている言葉はたくさんあるが、いつ、誰が決めたかわからない「名」、ことばの「呪」に、皆が縛られすぎていく気がするの、僕だけではないだろう。



滝田 洋二郎 (たきた ようじろう)  
1955年富山県福岡町(現高岡市)生まれ。  
86年「コミック雑誌なんかいらない!」がニューヨーク映画祭、カンヌ映画祭で絶賛され、注目を集める。以降、エンターテイメント性に優れた話題作を発表し続けており、現在、日本映画界を代表するヒットメーカーとして活躍中。主な作品に「病院へ行こう」、「僕らはみんな生きている」、「秘密」、「陰陽師」、「壬生義士伝」、「バッテリー」などがある。

以前監督した『陰陽師』(夢枕獏原作・脚本)という作品の中に、僕の好きな言葉がある。  
安倍晴明(陰陽師)と源博雅(宮廷貴族)による、「呪」をめぐる会話である。  
博雅「清明殿の言う、その『呪』とは、つまりなんなのだ」  
清明「そうですね。例えばこの世で一番短い

映画監督 滝田 洋二郎

映画はシナリオが命である。  
『バッテリー』においても映画の方向をめぐり、さまざまなディスカッションがあったが、全六巻の長編物語を、二時間の枠の中に詰め込まなければならぬことが問題だった。

- ・家族を中心にファミリー物に
- ・弟の病気を軸に難病物に
- ・野球のドラマを劇画風にデフォルメして
- ・ヒロインを膨らませ、少年との恋物語に
- ・最初から原作に忠実に、パートⅢまで
- ・この映画のテーマは？
- などなど

原作に対する皆の思い、こだわりが強すぎて、どれもが中らずと雖も遠からず、創作につきものの出口探しの状態に陥った。

こんな時は何度も何度も小説を読み返し、ただひたすらにその言葉を噛み砕くしかない。